二〇一二年一一月二八日（嵯峨野 参加者一五人）

竹垣に石蕗咲く嵯峨の小径かな　わかば
彩紅葉散らす祇王寺人混みぬ　〃
天蓋の紅葉に小さき去来墓　〃
皇女墓の光背のごと紅葉燃ゆ　〃
冬うらら俳句みくじは大吉と　ひかり
薄みどり差す竹林の冬日かな　〃
祇王寺へ敷石道や石蕗の花　〃
祇王寺の沈めとばかり散紅葉　〃
草刈れば右往左往すダンゴ虫　ちえ子
下校児を包む野焼の煙かな　〃
祇王寺の燃ゆる紅葉に亡夫悼む　〃
母と行く畦道楽し野菊咲く　〃
丸窓の紅葉明りに祇王祇女　菜々
苔庭の起伏に添ひて散り紅葉　〃
落柿舎へ続く人波冬うらら　〃
去来墓嵩の落葉に膝ついて　〃
つるし柿次庵の軒に乾きけり　かれん
柴垣に散りとどまりし冬紅葉　〃
祇王寺の天も地も染む紅葉かな　〃
添水鳴る落柿舎の庭去り難く　うつぎ
無縁仏肩寄せあへる紅葉影　〃
祇王寺の紅葉浄土にあそびけり　百合
冬帽子取りて額づく去来墓　〃
尺ほどの去来の墓や嵯峨しぐれ　あさ子
山門へ幾許（ここだ）散り敷く紅葉坂　〃
苔むせる去来の墓へ積む紅葉　きづな
奥嵯峨の枯野に画架を立つる人　〃
祇王寺の扉にたまる散紅葉　有香
冬晴に水音高鳴る筧かな　満天
御座船を浮かべて装ふ小倉山　はく子
妃陵真紅のもみぢ手向けられ　〃

吟行句会みのる選

二〇一二年一一月二八日（嵯峨野 参加者一五人）